

【実践研究】

主体的に遊びを創る子どもの育成と保育教諭の援助

——色水遊びから色彩遊びへの展開——

菊池 幸子*・川口 昌子*

キーワード：自然 環境構成 創造性 継続した保育 色水遊び
カラーセロハン・カラーポリ袋遊び カラフルドングリころがし

1. はじめに

平成 31 年度に大阪狭山市に認定こども園として移転・新築された大谷さやまこども園。当初、隣接する畑地（第 4 園庭）は長年手付かずのままで自然の宝庫であった。しかし、土壌が湿地で足元が悪く急なりのり面で見通しも悪いため、子どもたちのために利用できる環境ではなかった。そこで「大阪府緑の基金みどりづくり推進事業」の助成を受け、もともとの地の利を生かした“四季折々の自然と触れ合う場”へと整備することに至った。第 4 園庭周辺には田んぼの畦の草花が咲き誇り、水辺にはカエルやザリガニやヤゴが生息する。梅やクリや柿やビワが実り、カシやクスギの木からはドングリが落ちてくる。草むらではコオロギやバッタが跳ね、トンボや蝶も飛び交う。本園の園庭は、サッカーやドッチボールを楽しむ第 1 園庭・砂場の第 2 園庭・築山やジャングルジムがある第 3 園庭・そして自然と触れ合う第 4 園庭で構成されることとなった。自然豊かな第 4 園庭が身近になったことは、子ども達のみならず保育者にとっても喜びである。と同時に、保育者がより「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が示す指導の方向性を理解し教育的意図をもって働きかけるための学びが必要であると感じた。特に幼稚園教育要領第 2 章：環境「内容の取り扱い」では「幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然との関わりを深めることができるように工夫すること」とある。保育者自らが感性を豊かに保ち、「遊びを通して何を育てたいのか」「子どもの興味関心はどこにあるのか」と問いながら、環境にじっくりかかわる中でみられる子ども達の「なぜ?」「どうして?」というつぶやき・ひらめき・一瞬に現れた行為にアンテナを張り、子どもの好奇心、探求心を支えていくことが大切

*大谷さやまこども園（大阪狭山市）

である。

このように第4園庭の完成と、昨年度の自然豊かな里山・千早赤阪村「結の里」への遠足や宿泊保育を通して子どもが自然の中で自ら環境に働きかけ主体的に行動した経験を見通して、「自然とかかわって遊ぶことで、自ら考えようとする気持ちをもつ」を今年度の研究テーマにおき、ねらいを達成するために自発的な活動としての遊びや生活を目指すことにした。

しかし今年度は新型コロナウイルス感染症のため1号児の休園も続き、様々な制約の中での保育が余儀なくされた。そのような中においても園内研修を積み重ね、子どもの「主体性」と「環境構成」を保育者が意識することを重視してきた。夢中で自然にかかわろうとする子どもの写真から、子どもが何を体験しているのか・どんな思いでどんな育ちが見られるのかを『幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿』を手掛かりに読み取ったり、大阪大谷大学山本将之准教授の子どもたちへの造形指導における緻密な「環境構成案」から、3つの柱『知識・技術の基礎』『思考力・判断力・表現力の基礎』『学びに向かう力・人間性の基礎』を手掛かりに、保育者の援助や環境構成について深めることを園内研修の主題とした。

2. 実践方法

本稿の実践報告も、本年度目指す園内研修の中の一つのスタートであった。第4園庭から始まった色水遊びの環境構成を整えていく中での遊びの深まりや子どもの変容を保育者間で探り、「3つの柱」と「10の姿」を手掛かりに読み取りをすることで、子どもたちに育っている力が見えてきた。この園内研修での学びを基盤にして保育計画を立てていくことで、子ども達は二学期になっても色の不思議・興味・関心は途絶えることなく、セロファンや絵の具の性質や仕組みを感じ取ったり、気づいたり、考えたり、工夫したりして、友達と一緒に多様なかわりを楽しむようになっていった。このような主体的に遊ぶ子ども達の姿を保育者が丁寧に読み取り、記録し、振り返り、次の展開を予測して、環境構成や援助の在り方を探り、作品展へと継続していった4歳児「まつ組」の実践を報告する。

3. 子どもの活動

3.1 設定理由

2020年2月末に新型コロナウイルスの感染者数が拡大し、行政から要請を受けた本園も3月からの1号児の登園を見合わせる事になった。1号児^{注1)}休園中、2号児^{注2)}の子ども達には春に完成した自然豊かな第4園庭や広い園庭で五感を使ってのびのびと遊んで欲しいと考えた。その中の一つに、園庭の草花を使った「色水あそび」があった(写真1)。2号児が作った色水



写真 1
第 4 園庭の色水あそび。



写真 2
色水あそびの様子。隣の子の遊びをじっと見つめる
真剣な目



写真 3
色んな材料を入れたらどんな色になるのかな？

を小さなペットボトル容器に入れ、保育室に並べておいたところ、久しぶりに登園してきた 1 号児の S 児が見つめて「これ何？すごく綺麗！」と興味津々な様子。2 号児の子ども達と遊んだ色水あそびの話をするすると「私もやってみたい！」。それを聞いた周りの 1 号児も「やりたい！」「楽しそう！」と色水あそびに興味を示した。

毎日登園していた 2 号児と久しぶりに登園する 1 号児の関わりや育ちを鑑みて、まず一番に必要なのは子ども達が毎日夢中になってみんなで取り組める遊びを設定する事が重要であると判断した。その上で今大切にしたい事は、身近にある自然に気付き季節の移り変わりを美しいと思える感性。気付いた事や考えた事を試そうとする思考力。自分で遊びを見つけ夢中になって取り組む自主性。友だちと関わる事で協力したり思いを共有する協調性や社会性などの育ちであると考え、季節的な事柄も踏まえた上で「色水遊び」を設定することに至った。その経過を図表 1 に示す。

3.2 色水遊びの経過

図表 1 色水遊びの経過

日付	6月24日(水) 晴れ	6月29日(月) 晴れ
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・水の気持ち良さを味わう ・身近にある自然に興味を持つ 	<ul style="list-style-type: none"> ・素材による色水の違いを楽しむ ・道具を使って色水を作ることを楽しむ
場所・人数	第4園庭 60名	ぶどう組前 30名
準備物	道具：すり鉢11個・すりこぎ棒11本・こし器・透明コップ・たらい1個・ペットボトル・ビニール袋・ゴミ箱 素材：赤紫蘇・パプリカ・オレンジの皮	道具：すり鉢16個・すりこぎ棒11本・こし器・透明コップ・たらい2個・机6台・雑巾・バケツ2個・ハサミ・水を入れる容器・ペットボトル・ゴミ箱・ビニール袋 素材：赤紫蘇・パプリカ・人参・紫キャベツ・ブルーベリー・やまもも・画用紙(赤・青・黄)
環境構成 前回の反省からの配慮	<ul style="list-style-type: none"> ・濡れる事を気にしなくていいように裸足・スモックで行う ・交代してすり鉢が使えるように水遊びと並行して行う。 ・伸び伸びと遊べるように広い場所で遊ぶ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・材料や道具は選びやすいように並べておく ・友達の活動が見やすいように対面式で遊ぶ ・材料は使いやすいように刻んでおく ・靴は履いたまま行う ・机は日陰に設置する
援助	<ul style="list-style-type: none"> ・すりこぎの扱いが難しい子には援助をする ・「気持ちいい」「楽しい」「不思議だな」などの子どもの気持ちを大切にしながら活動を進める。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの発見や感動に寄り添うような言葉がけをする ・子どもの発見や自発的な遊びを見取り、遊びが広がるような援助をおこなう
反省・考察	<p>すり鉢が少ないこともあり、交代で遊べるようにと水遊びと並行して行ったが遊びが分散してしまいじっくりと遊ぶ事が出来なかった。第4園庭の日向で裸足では気持ち良く遊ぶ事ができなかったため次回は靴を履いて日陰の机の上で行うようにしたい。たらいや蛇口から直接水をいれるのが難しい様子だったので、少しずつ水を入れる為の道具を準備が必要だと思った。ビニール袋とすり鉢ではすり鉢の方が人気があり、取り合いになる場面も見られたので、どちらも経験できるように準備しようと思う。</p>	<p>植物より鮮やかな色が出る為、色混ぜあそびに繋がればと思い画用紙を出したが黄色の画用紙で作った色水が思ったよりも薄かった。保育者が事前に試しておくべきだと思った。次回はオレンジに近い色を使う。色水の手順を伝えるのに時間がかかってしまい、活動の様子をしっかりと見とる事が出来なかった。生活画では個人持ちのマーカーを使ったが、色塗りの方に集中力が分散されてしまった。</p>
次回への展望	<p>友達が作った色水を興味深そうに眺める様子などが見られた、その興味を次につなげて保育に取り入れていきたい。</p>	<p>10時半から活動を始めて、片付けと生活画も含めると、給食の時間ギリギリになったので次回は30分早めに始めようと思う。準備や片付け等も子ども達とともに行うようにする。</p>

主体的に遊びを創る子どもの育成と保育教諭の援助

日付	7月2日(木) 晴れ	7月15(水) 晴れ
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・素材による色の違いや混色を楽しむ ・工夫したり考えたりしながらあそぶ 	<ul style="list-style-type: none"> ・素材による色の違いや混色を楽しむ ・粘り強くかかわって満足感を味わう ・発見したことや気づいたことを伝えることを楽しむ
場所・人数	ぶどう組前 30名	ぶどう組前 30名
準備物	道具：すり鉢16個・すりこぎ棒11本・こし器・透明コップ・たらい2個・机6台・雑巾・バケツ2個・ハサミ 水を入れる容器・ペットボトル・ゴミ箱・ビニール袋 素材：赤紫蘇・パプリカ・人参・紫キャベツ・ブルーベリー・すもも・画用紙(赤・青・橙)	道具：すり鉢16個・すりこぎ棒11本・こし器・透明コップ・たらい2個・机6台・雑巾・バケツ2個・ハサミ 水を入れる容器・ペットボトル・ゴミ箱・ビニール袋 素材：花壇の花 (マリーゴールド・アサガオ)
環境構成 前回の反省からの配慮	<ul style="list-style-type: none"> ・机を日陰に設置する ・材料や道具は選びやすいように並べる ・友達の活動が見やすいように対面式で遊ぶ ・材料は使いやすいうように刻んでおく 	<ul style="list-style-type: none"> ・机を日陰に設置する ・道具は選びやすいように並べておく ・友達の活動が見やすいように対面式にする ・あらかじめ園庭の植物について話をしておく。 ・準備や片付けも子ども達と一緒にやる
援助	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども同士の関わりを見取る。 ・面白い発見をした子などがいれば周りの子に知らせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの発見や感動に寄り添うような言葉がけをする ・自主的に遊べるように見取り、必要に応じて援助をする。
反省・考察	<p>前回の活動と比べると、子ども達の動きや遊び方に自主性が見られるようになり、繰り返して遊ぶことの大切さを実感した。</p> <p>時間配分・環境を見直した事で余裕が生まれ、生活画でもゆっくりと話を聞くことができた。</p>	<p>すり鉢の取り合いになる事を予想していたが、好んでビニールを使う子が多かったことに驚いた。何度か繰り返し遊ぶ中で使いやすい道具を自分で選ぶ事ができるようになっている様子だった。花の方が赤紫蘇や人参より色が出やすくより楽しむ姿が見られた。生活画ではマーカーの黒だけを使うようにしたところ絵に勢いが出た。</p>
次回への展望	<p>保育後すぐの発表で「何が一番楽しかった?」「頑張ったところはどこですか?」という質問に対して「水遊び」と答える子が多く、楽しいと感じた瞬間を切り取って言葉にするのは難しい様子だった。</p> <p>他の活動でも「発表する」という経験を増やしていこうと思った。</p>	<p>保育後すぐの発表では前回よりも手を上げる子が多くなっていた。前に出ると緊張してしまふようだったが、発表するという事がとても楽しい様子である。引き続き様々な場面で取り入れていこうと思う。</p>

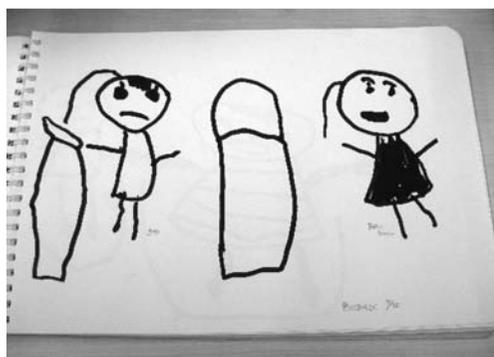


写真4 6月

S児「Aちゃんと隣で遊んだ。ペットボトルに色水入れた」

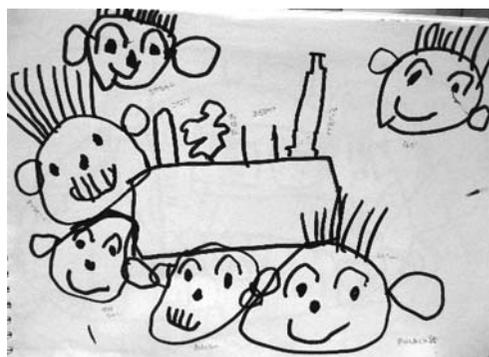


写真5 7月

Y児「お花で色水作った、AちゃんとSちゃんと色水作った。YちゃんとN君とS君が色水見てるよ」

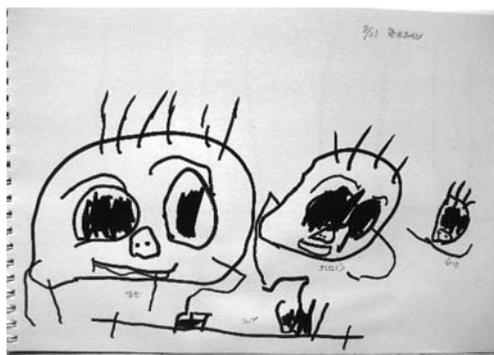


写真6 8月

「棒でゴリゴリしたら色水ができたよ」手が伸びてすり棒をしっかり持っていことがよく表れている



写真7 9月

「作った色水を紙に流したら滑り台みたいやった」

3.3 色水遊びから見えた子どもの姿

クラス全員での色水遊びは6月中旬から9月中旬まで繰り返し広がった。初回(6/15)の色水あそびでは、経験のある2号児は好きな材料を選んで迷うことなく遊ぶ様子が見られたが、初めて遊ぶ1号児は材料選びや道具選びから戸惑う様子が見られた。すり鉢の数が少なかった為、ビニール袋でも色水が作れるようにと準備もしていたが「どうやって遊んだらいいかわからない」「どうやって水入れるの?」と保育者に援助を求める姿も見られた。水と材料を入れて遊び始めたが、草花の量や道具の扱いが難しく「色が出ない!」「難しい!」と、この日は色水あそびの楽しさを味わうことなく終わってしまった。色水の入ったペットボトルを保育室の窓辺に置いておくと、数日後「先生!色水の色が変わってるよ!」「なんか薄くなってる。なんでやろ?」と朝からペットボトルを囲んで大騒ぎする姿が見られた。保育者も不思議に思い

インターネットで調べてみると、植物の中に含まれている色素の成分の中には紫外線にあると退色する物もあり、アントシアニンという物質の特性という事がわかった。子どもたちにその場で簡潔に伝えようと、何か感ずることがあったようで、「違う材料でやったらどうなるのかな?」「こんどやってみよう!」と子ども達で話し合っていた。「色水あそび」の楽しさを味わえないまま終わってしまったことで遊びを楽しみにする気持ちを持っていないのではないかと不安に思っていたが、保育室という身近な環境に飾っておいた事で色水が透明に変化していることが子ども達の目に止まり、「違う材料で試してみたい!」という次の遊びへの期待に繋がった。

2日目、この日は晴天で気温も高かった為「第4園庭」の芝生で裸足になって活動する事にした。しかし、裸足に慣れておらず足の裏の感覚が気になる子や、屋根の無い場所だった為に日差しや暑さが気になる子がいて集中して遊ぶ事が出来ない様子であった。道具の扱いもまだ難しい姿も見られたが、少しずつ自分の思う色水を作る事ができるようになった子も出てきて、子どもたちが混ざり合って遊ぶ中でお互いに刺激を受け「〇〇くんみたいな色水を作りたい」「もっと上手になりたい」「こんな色の色水を作りたい」という気持ちが高まっていく姿(写真2)がみられた。

3日目、「日陰で靴を履いて行く」「机を準備する」「材料を見やすいように並べておく」など前回の反省を踏まえて環境の見直しを行い、素材も潰れやすく色が出やすいブルーベリーやヤマモモを取り入れ、より楽しみながら遊べるように準備した。すると今まで色水を作る事が難しかった子ども達から「先生!色水できた!」「見て見て!きれいな色!」と嬉しそうな声が上がった。この日は「もっとやりたい!材料のおかわりしてもいい?」「こんどは違う材料でやってみる!」と夢中になって何度も何度も挑戦する姿(写真3)が見られた。今回も作った色水はペットボトルに入れ保育室に飾る事にした。自分の作った色水にとっても愛着を感じている様子で、何度もペットボトルを眺めに行く子や、自分が作った物を得意げに友達や他のクラスの先生に見せている子もいた。

4日目の朝、担任が色水あそびの準備をしていると「今日色水やるの?用意を手伝いたい!」「荷物を運んであげる!」と次々に子ども達の声が上がった。大きい荷物では「だれかそっち持って!」「わかった!」「わっしょい!わっしょい!」と元気な声で呼び掛け合いながら運ぶ姿が見られた。活動では「いろんな物まぜてミックスジュースにするねん。」「いっぱい混ぜたら面白い色になった!」と工夫をして遊んだり、「一緒にジュースやさんしよう!」などと友達と交わりながら遊ぶ姿がみられた。このように遊びが深まっていく中で、思ったように色水が出なくて困っているH児の様子に気づいたY児が「水の量が多いから色が出ないんやで。」と伝える姿が見られた。H児はY児に教えてもらいながら水の量を減らしたことできれいな色の色水を作る事ができてとても満足そうであった。また、作り方を伝えたY児もと

でも誇らしげな様子であった。この日は準備から片付けに至るまで子どもたちが終始楽しみながら主体的に活動する姿が見られた。

繰り返し遊ぶことで積み重なってきた経験や友達との関わりがここにきて一気に発揮されたのだと感じた。そしてこの日を境に子ども達の遊びに進展と広がりが見られるようになっていった。当初はすり鉢の方が人気で取り合いになる事もあったが、何度も遊びを繰り返す事で自分が使いやすい道具を迷わず選ぶ姿が見られるようになった。中にはすり鉢に材料を入れ、手で揉みこんで色を出し「先生！こんな方法でも色水できたよ！」と見せに来る子もあらわれた。友だちとの関わりもより深みが生まれ、K児が薄い色しか出ずに困っていると、近くで遊んでいたN児が「お花の量が少ないんちゃう？」と言ってK児の為に花を摘む姿なども見られた。「クローバーを入れてみる！」「このはっばどんな色になるのかな？」と園庭の様々な草花を試したり、太い茎をコップにさして「ストローみたい。ジュースどうぞ！」「ありがとう！」と友だちとごっこ遊びをするなど、材料選びや遊び方にも広がりが見られるようになった。子ども達が夢中になって色水あそびを楽しんでいる姿を受けて、自由遊びでも色水あそびができるように環境を整えたところ、もっと遊びたいと感じた子は意欲的に遊ぶようになり、時には他学年の子ども達に色水の作り方を教える姿も見られるようになった。

本園の自然豊かな環境にかかわり、保育者が子どもの姿を見取りながら環境を再構成していく中で、子ども達の自ら考えようとする気持ちの育ちが見えた。

3.4 活動後の振り返りと発表

色水あそび後の振り返りでは、当初進んで発表する子が少なかったが「この色はどうやって作ったの？」「気に入っている色はどれかな？」など保育者が具体的な質問を心掛けたり、遊びが充実していく中で、「ごりごりするの、難しかった！」「アサガオで青色ができた。」「ビニール袋に入れてモミモミしても色水ができたよ。」など手応えのあった事を言葉にして伝えようとする姿が見られるようになっていった。また、「どうやってごりごりしたの？」「アサガオで違う色ができた人いるかな？」「ビニール袋でもきれいな色水ができたんだね」など、保育者が子どもの気付きをクラスに投げかけたり広げたりすることで、「次はあの棒を使ってみたいな」「私は赤いアサガオで色水を作ってみよう」など次の遊びに見通しをもち楽しみにする姿も見られた。また遊びこんでいる中で「こんなキレイな色水出来たから今日発表したよ！」「みんなに見せてあげたいから発表する！」と伝えることを楽しみにする姿も見られた。また、「私も一緒にやったよ！」「〇〇ちゃんが作った色きれいやった。」など、友だちのしていることをよく見ていて、友だちの良さに気づき、共感したり心を寄せたりする姿が見られるようになり、自らも認められることで自信につながり仲間意識が深まった。

3.5 生活画

本園は生活や遊びの充実を基礎に、園の生活の中で心が動いたことを絵に描き伝えあう「生活画」を日常の保育の中に位置づけている。色水遊びで、遊びや友達とのかかわりが深まる中で「生活画」の変容も見られた。当初は「自分」や「道具」を描く子がほとんどであったが、次第に「友だち」が描かれるようになり（写真4・5）、道具を持っている手や使った植物なども描かれるようになっていった。「〇ちゃんと一緒にごりごりしてる場所・・・」（写真6）「作った色水を紙に流して、滑り台みたいになった場所・・・」（写真7）と友達と一緒に切磋琢磨した遊びの中で心に響いたことを絵に描き、お話を伝え合う表現を楽しんだ。

3.6 遊びの発展の予感

この日も保育室に飾ってある色水を手に取って中を覗いている Y 児と S 児が「ペットボトルの中キレイ。」「ほんとや～、キラキラしてる。」などと伝えあっている。その様子を見ていた周りの子ども達も集まってきてペットボトルを目に当て「お部屋の中がオレンジになる!」「私は青や!」と色への興味関心は途切れない。このような姿から保育者は新しい遊びの発見と広がりを感じた。色の不思議や好奇心を感じている子ども達が、色水あそびで見られたような「主体的な遊びの発展」に繋がってほしいと願い、既成のおもちゃを片付けた。自由に製作する遊びのコーナーに「カラーセロハン」や「カラーポリ袋」を出し、廃材の箱や容器の種類や量を増やし、テープ・ペン・ひも等の素材と道具を充実させていった。



写真 8
うわーこどもえんがもえている!



写真 9
冒険に出発! 次はあっちへいってみよう



写真 10
サングラス。右と左で色を変えている。

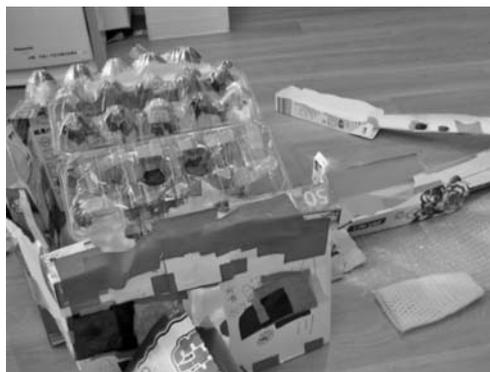


写真 11
カラフルお城。卵パックにセロハンを貼り付けた屋根と、色とりどりに彩った窓。
3~4人の子どもが1ヶ月近くかけて作った作品。



写真 12・13
セロハンを重ねるN児。色んな組み合わせを作って何回も試している。
隣ではN児の遊びを真似てみようとする子どもの姿がある。



4. カラーセロハンあそび

「うわ～！こども園が火事や！」(写真8)「水の中みたい！」子ども達が顔にカラーセロハンを押しあてて遊んでいる。「こども園を冒険しよう！」(写真9)とたちまち冒険ごっこが始まった。そのうち「望遠鏡つくろう！」「宝石つくって宝物にしよう！」とカラーセロハンを使っただけのあそびが広がっていった。色への興味が尽きない子ども達は、次第にセロハンの色を使い分けたり、切り抜いた素材や画用紙に貼るなどの工夫が見られるようになっていった。日々繰り返される遊びの中で「重ねたら色がかかったよ」「ほんとや！紫になった！」「オレンジになった！」「あれ？いっぱい重ねたら変な色になった！」と、セロハンを重ねると色が変わ

化する面白さに気づき（写真12・13）、お気に入りの色を作ってそれを制作に使う姿も見られるようになっていった。友だちと協力しながら何日も何日もかけて作った「カラフルお城」（写真11）では、友だちとイメージを共有する力・目標に向けて粘り強くかかわる力が育ってきている事を実感した。

5. カラーポリ袋あそび

カラーセロハンと同時期に遊びの材料として出したカラーポリ袋では、セロハンとはまた違う遊びの広がりが見られた。絵を描いたカラーポリ袋を繋げて「カラフルシート作り」を楽しみ、大きくなったカラフルシートを子ども達が保育室に飾った。次第にカラフルシートの中で、朝はごっこ遊びを楽しみ、食後はゆったりと絵本を読む姿が見られるようになり、子ども達にとってカラフルシートは、秘密基地のような特別な空間作りにも繋がっていった。ある日「お外に持って行きたい！」と一人の子が言うと、周りの子ども達も「持って行きたい、持って行きたい！」と声が上がってみんなで園庭に運んだ。シートを遊具に被せ（写真14）「テント作ったよ！」「みんなでキャンプしよう！」。またシートを持って走って（写真15）「こいのぼりみたい！」「ひらひらしてる！」など、多様な遊びを楽しんだ。子どもたちはシートに穴が開いたら友達と修理を繰り返し、クラスの大切なものとなっていった。



写真 14

カラフルシートのテント。他学年の子どもも一緒にあそんでいる。



写真 15

地面にシートがつかないように走って遊ぶ。



写真 16

食後の絵本タイムは大好きなカラフルシートの下で。



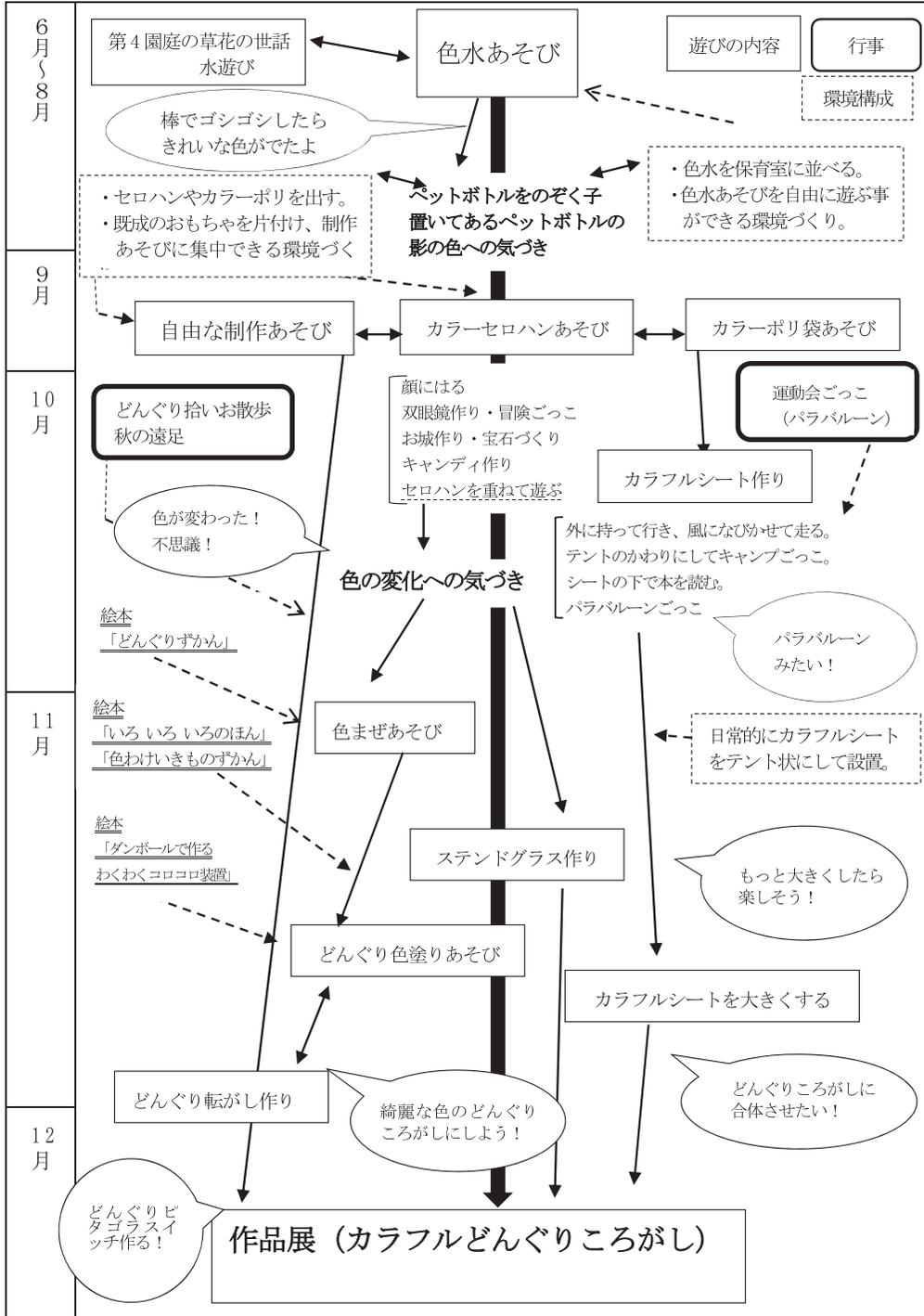
写真 17

友だちと協力して破れないように大切に運ぶ。

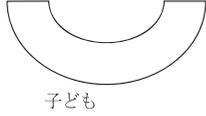
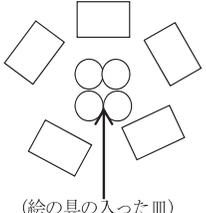
6. 作品展までの活動の流れ

色水遊びから作品展までの活動の流れをまとめてみた。

図表 2 色水遊びから作品展までの活動の流れ



図表3 「色混ぜ遊び」 保育案

保育案			
日時	令和2年 10月28日(水) 保育者 菊池 幸子		
対象児	4歳児まつ組30名		
主題	色混ぜあそび		
準備物	白画用紙30枚・絵の具(赤・黄・青・白)・絵の具用の皿28枚・新聞紙・濡れ雑巾・画版30枚 絵本(いろいろいろいろの本)		
ねらい	工夫したり考えたりしながら混色あそびを楽しむ		
時間	幼児の活動	保育者の留意点	環境設定・準備物
10:00	<ul style="list-style-type: none"> 絵本を見る (いろいろいろいろの本) グループに分かれて色混ぜあそびをおこなう。 発表 	<ul style="list-style-type: none"> 子ども達の見やすい位置で本を読む。 絵本の内容を子ども達と確かめながら読み進めるようにする。 読後は感想等を聞いて、より一層絵本の内容を深め本時の活動に繋げるようにする。 今から色混ぜあそびをする事を告げ使う色の紹介をする。この時は白はまだ紹介しないようにする。 (白は後から追加で出す) グループに分かれた子から色混ぜあそびを始めるように告げる。 子どもの発見や感動に寄り添いながら遊びの様子を見取る。 ある程度色混ぜ遊びが進んだところで様子を見て「白」を出す。 子どもの気付きや思いを大切に、遊びの中で子どもの心がどのように働いているのか読み取るようにする。 子どもの発表に共感し、大切にしよう援助を行う。 	<p>絵本…いろいろいろいろの本</p> <p>保育者 ○</p>  <p>子ども</p> <p>白画用紙・絵の具(赤・黄・青・白)・絵の具用の皿・新聞紙・濡れ雑巾・画版</p> <p>(画版)</p>  <p>(絵の具の入った皿)</p> <p>上記の物を保育室に6セット置く</p>

7. 色まぜあそび

カラーセロハンの混色遊びに繋がり「色」への興味がますます深まっていく子どもたちの姿を見て取り、新たな素材で色の不思議を味わってほしいと、絵の具を使った「色混ぜ遊び」の計画を立てた。

色混ぜ遊びの最初は、赤・黄・青の「色の3原色」を準備し、中間色（オレンジ・紫・緑など）を作って遊ぶ楽しさを味わってほしいと考えた。好きな色を指ですくうと「みてみて！むらさき出来た！」「緑色になった！」今までの経験から混色のイメージが既に出来上がっているようで、迷ったり悩んだりする姿はほとんど見られなかった。指が汚れると自ら手を洗いました新しい色を作る。この流れが繰り返され、画用紙はあっというまに色で埋め尽くされていった。子ども達の様子を見取り「白」を出してみると、気付いた子どもがすぐに使い始め「ピンク色できたよ！」「めっちゃきれいな水色！」と混色の面白さを味わっていた。また「赤が少なかったら薄いピンクやけど赤が多かったら濃いピンクになったよ」など、絵の具の量を加減して濃淡を工夫する姿も見られた。自分で作った色を友達と見せ合ったり、友達が作った色の作り方を教えてもらったり（写真18）と、没頭して遊ぶ姿が見られた。この後、自由遊びのコーナー遊びとして環境構成したところ、興味のある子は継続して遊び、時には他学年の子どもも交えて楽しむ姿（写真19）が見られるようになった。

このように絵の具の混色遊びをすることで、より一層「色彩」に興味を持ち、友達と一緒に試行錯誤する姿が見られた。



写真 18

友だちの作っている色に興味津々にのぞく子ども。



写真 19

コーナー遊びにて。他学年の子どもも一緒に楽しむ。

8. どんぐり転がし

10月に入ると、近所の公園へ「どんぐり拾い」に行った。それをきっかけに、制作遊びをしている子どもの中に「どんぐり転がし」を作り始めた子がいた。最初は数名で始めた遊びだったが、興味を持った子が増えていき、クラス全体を巻き込んでの活動と展開していった。当初は切った牛乳パックを繋げて小さいコースを作る事を楽しんでいたが「隣のチームと繋げてみる！」と、子どもたちの視野も広がり、コースを広げていくことを楽しむようになった。次第に、どんぐりを転がしてみた子が、高さが必要な事に気づき、手で持ち上げたり、壁に固定しようとする姿が見られるようになり、それとともに曲がったコースや分かれ道なども作られるようになっていった。

遊びは毎日繰り返され、「おとし穴！ここにおちたらアウトやねん。」「点数がついてるゴール作った！」など仕掛けを考えたり、目的に応じた材料を探すなど、ますます遊びが広がっていった（写真20・21）。コースを支える子、テープで固定する子などの役割分担ができ（写真22）、どのように繋げるか相談したり、友だちの作った仕掛けに関心する姿も見られた。友達と一緒に試したり、考えたりして繰り返し遊ぶ中で、驚きや発見、喜びを共有し、子ども同士のかかわりが深まっていった。「色水遊び」で繰り返し試行錯誤して遊び、満足感・達成感を味わった経験が、友達とかかわる力や考える力、工夫する力に繋がったと思われる。



写真20・21
どんどん広がるどんぐり転がし遊び。



写真 22

「ちよつともつて。」「いいよ！」何気ない活動にも子ども同士の関りが見られる。



写真 23

遊びの準備も自分達で。これは色水あそびの準備。

9. 作品展に向けて

11月に入り作品展に向けての話し合いでは、どんぐり転がしを作りたいという意見が出た。「いろんなコースを繋げる!」「高いところから落とす!」など沢山の意見が飛び交う中、ひと月間コツコツとお城を作っていたS児が「カラフルお城をどんぐり転がしに合体させたら面白いと思うねん!」と提案した。その言葉に刺激を受け「どんぐりのお城って事にしよう!」

「カラフルシートも使おう!」「キレイな色のどんぐり転がしにしよう!」など、子どもたち一人ひとりのイメージが膨らみ、自分なりに思ったことや考えたことを友達と伝え合い、共有し合う満足感を存分に味わう話し合いになった。12月の作品展に向けての遊びが本格的に始まり、どの遊びも子どもが主体になって展開していった。

当初どんぐり転がしの土台には段ボールを使う子が多かったが、遊びが進むにつれて箱などを組み合わせる事で高さの調節をしようしたり、コース自体も牛乳パックだけでなく紙管や食品トレイを使って、より難しい遊びに作り変えていこうと工夫する姿が見られるようになっていった。傍らでは絵の具を混ぜてどんぐりに色を付ける子や(写真26)、牛乳パックを切り抜いてカラーセロハンを貼りトンネルを作る子などがいて(写真27)、「色の世界」と「どんぐり転がし」が混じり合い、クラスの遊びの軸となっていった。「流れるプールのどんぐり転がしやねん。」「ここに落ちたらワニに食べられるねん。」「ひみつのドアがついてるねん」など、子ども達の思いは日を追うごとに膨らみ、作っては遊び、壊れたら作りなおす遊びが繰り返された。一ヶ月間子ども達一人ひとりが毎日目的を持って夢中になって取り組み、友達と一緒に試行錯誤して、楽しい仕掛けやお話がたっぷり詰まった「カラフルどんぐりころがし」が

出来上がった。

このように活動が盛り上がっていく中で、普段から活動の目当てを見つけにくく、この活動にも積極的に参加しようとしないう M 児に「何か面白い仕掛けないかな・・・」と保育者が話しかけてみると、友達が創作しているドングリ転がしを見ながら、「ここにどんぐりエレベーター付けたらどうかな・・・」とつぶやいた。「それ面白そうやね・・・」と保育者と一緒に材料を選んだり仕掛けを考えたりしていると少しずつ形が見え始め、表情も生き生きとしてきた。その後は夢中で自分で作り出し、その様子を見ていた周りの友達も一緒になって「どんぐりエレベーター」を完成させた。M 児が中心になって遊んでは修理を繰り返し、クラスの中でも「M くんのどんぐりエレベーター」(写真 25) となり満足そうな姿が見られた。クラスの遊びが深まっていく中で友達の姿を見て「やってみたい」「作ってみたい」「でもどうしていいかわ



写真 24

スタンドグラスを作って窓に飾る。「お部屋もキレイにかざりつけるねん。」



写真 25

どんぐりエレベーターを作る M 児に「これすごいね!」と声をかけている友達。M 児はうまく動かさ何回も試している。



写真 26

絵の具を混ぜてどんぐりに色をつけている。



写真 27

カラーセロハンを貼ったトンネルを作っている子ども達。

からない」と感じていた M 児が、保育者の援助で安心感をもって取組むようになり、周りの子ども達とも伝え合ったり認められたりする中で、自信をもって遊ぶ姿が見られるようになった。

10. 「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」に視点を当てた考察

色水遊びのきっかけは保育室に飾っておいた色水を見た S 児のつぶやきであった。ひとつのきっかけが子ども達の興味関心を沸き立たせ、次第に周りの子ども達にも伝わっていく姿から、改めて環境構成の大切さを感じた。夏の色水遊びでは、図表 1（色水遊びの経過）に示したように、その日の反省から子ども達の動線や、使う素材や道具などの環境を整えていく中で遊びが深まり、子ども達が主体的に遊ぶ姿が見られるようになっていった。自然にかかわって遊び、環境構成が整えられていく中で、子ども達が自ら考えようとする姿が見られるようになった。室内においては、子ども達が園生活に慣れたのを見計らって既成のおもちゃを片付け、画用紙やテープ類・段ボールや紙筒など、遊びが継続されるように制作活動のコーナーを充実させていった。カラーセロハンやポリ袋を出すタイミングも、子どもたちの色への興味が深まった頃に出すことで、より「ここに使ってみたい!」「ここに貼ったらきれいになる!」など、気持ちの高まりとともに工夫して使う姿が見られた。また、室内に置く絵本も環境の一つであり、子ども達の遊びや興味によって入れ替えを行った。特に「こんがらがっちシリーズ【著者・ユーフラテス 出版・小学館】の迷路の本は、どんぐり転がしのコース作りや仕掛けの一助になったと思われる。色水遊びや色混ぜ遊びも、繰り返し遊べるようにコーナーの一つとして環境構成する事で、他クラス他学年の子どもも参加するようになり、教え合ったり情報を交換したりして繋がりが出来ていった。

このように様々な環境にかかわるなかで、自分の思いを出して遊んだり、友達と一緒に考えたり試したりすることで満足感や達成感を味わい、発達に必要な経験を繰り返し積み重ねられるように環境を再構成させていくことの大切さを改めて感じた。

色水遊びから作品展に至るまでの約 4 ヶ月間、子ども達の遊びは様々に形を変えながらも途切れることなく継続されていった。その中で見られた子ども達の変容や成長を「幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿」になぞらえながら振り返ってみた。

①健康な心と体

新型コロナウイルス感染症対策のための休園が明けた 6 月、長い休みが影響して泣きながら登園する子、新しいクラスに戸惑ったり好きな遊びが見つからない子の姿もみられた。しかし保育者と信頼関係ができ遊びが充実してくると、友達と一緒に園生活を楽しみに生き生きとした表情で登園するようになった。これは好きな遊びを繰り返し行うことで自発的な遊びが生ま

れ、その中で友達と関わる楽しさ、自分の力で遊ぶ楽しさを味わったからと考える。

②自立心

様々な面での成長が見られた子ども達だが、目覚ましく成長がうかがえたのは「自立心」である。色水あそびでは当初「お手伝い」として準備や片付けを進んで行う姿は見られたが、活動が深まるにつれて「必要だから準備する。」「次も使いたいから片付ける。」という思いに変化していった。それは遊びの中だけでなく、必要と感じた物は自分で準備し、大切にしたいと感じた物は自ら整理整頓するなど、生活力にもつながっていった。また様々なことに諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信をもって発言し行動するようになった。

③協同性

重い物を持っている子を手助けする・友だちに支えてもらってテープを貼るなど、活動中に協力し合う姿が見られるようになっていった。このような経験の積み重ねの中で友だちの思いに気づいたり、相手の為に何をしたらいいかを考えようとする姿が見られるようになっていった。次第に友達と遊びへのイメージを共有するようになり、同じ目的に向けて考えたり、工夫したり、役割分担をしたり、協力したりするようになった。

④道徳性、規範意識の芽生え

作品展に向けての活動が本格的になってきたある日、リズム運動の中でA児がリズムに乗れなかったことに笑いが起きた。すると数名の子ども達から「笑ったらあかん！」と声が上がった。活動を止め、どうしてなのか理由を尋ねると「Aちゃんが恥ずかしいと思うから。」との事であった。活動後の振り返りなどで友だちの気持ちに触れ寄り添う事で、子ども達の中に相手の気持ちを考えて行動したり発言したりする力が育ったといえる。また、友達と一緒に切磋琢磨して作ったドングリ転がしには愛着があり大切に扱おうとする気持ちから、壊れた部分は修理を繰り返し、運ぶときは友達と息を合わせてそっと運ぶ姿が見られた。

⑤社会生活との関わり

どングリ転がしにおいて子どもたちの参考になればと準備していた本『段ボールで作る わくわくコロコロ装置』【著者 コロコロ研究所（監修）・ブティック社】を友達と一緒にのぞき込む姿がよく見られた。必要だと思った情報を取り入れて活用したり、伝え合ったり、役立てながら活動する力が育ったのだろう。また、作品展を心待ちにする中で「お家の人と一緒に遊びたい。」という思いが強く、これは楽しい気持ちや満足感を愛着のある家族と共有したいという子どもの思いで、社会生活と関わっていく大切な基盤である。

⑥思考力の芽生え

色水あそびの活動から作品展に至るまで、好奇心⇒試行錯誤⇒修理・作り直し⇒伝え合い⇒満足感 の繰り返しであった。「色水が出ないのはなぜだろう？」「穴を開けたところにカラーセロハンを貼ったらどうなるかな？」などの個人的な試みから、どングリの転がり方の予想を

たてて製作をする姿に成長を感じた。上手いかない時もあり、諦めかけたり悩んだりする姿も見られたが、頑張って成功して満足感を味わうことが、自分の力で取り組む楽しさから思考力の芽生えに繋がった。

⑦自然との関わり、生命尊重

自然豊かな第4園庭での色水遊びでは、パンジーやクローバー、ヨモギやマリーゴールドなど、子ども達が自分で素材を摘んで色水遊びを楽しんだ。10月末には、園庭に野ブドウが沢山実ったのをみつけた子ども達が、さっそくすり鉢に入れて潰して遊んでいた。冬野菜の栽培では水やり当番以外の子どもも毎日プランターをのぞきこみ、発見したことや気づいたことを報告することを楽しんだ。園庭での色水あそびという経験を通して身近にある自然への興味関心やそれを取り入れて遊ぶことの楽しさに気付き、たくさん満足感を味わったことがその後の活動の深まりにつながった。また、カラーセロハン遊びでの光と色の不思議やカラフルシート遊びの風のご様子など、身の回りには自然の面白さや科学する心に触れる事ができた。

⑧数量、図形、文字等への関心感覚

当初は作りたい物に対して材料が適量ではなく、思ったように遊びが進まなかったり余らせてしまう事の繰り返しであった。しかし活動が進むにつれ「○○を△枚欲しい。」など明確な数を伝えるようになり、「あと○個。」など見通しをもつての数量を捉えるようになっていった。遊びが深まり自ら考えようとする中で、材料の不足分や適当な形などを試行錯誤し、数量や形への感覚を捉える育ちが見られた。また、作りかけの作品に対して触らないように文字で表示を作ろうとする姿も見られた。これは作品への愛着と他者に自分の思いを伝えたいという気持ちが文字への興味につながった。

⑨言葉による伝えあい

遊びの深まりとともに経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で伝えようとする姿が見られるようになった。色水遊びで十分に遊んだ後の片づけでは、「私はカップ洗うのでNちゃんは机を拭いて!」「わかった!」「私はカップ洗うの手伝うよ!」「ペットボトルは私が部屋に持っていくね!」などと、言葉で伝え合って役割分担する姿が見られた。また仲良しの友だちと一緒に座りたくて席の取り合いになるトラブルが起こった時は、保育者の仲介を求めずに自分達で話し合っ解決しようとする姿が見られるようになった。「SちゃんはMちゃんと一緒に座ろうって約束してたのに違う子と座るって言って泣いてる・・・」「Mちゃんは約束守って貰えなくて可哀想。」など、状況やその経緯、相手の気持ちなどを考えて話をしている。遊びの中で「楽しかった事を共有したい。」という気持ちが伝えあいを生み、さらによりよい遊びを育む為に「相談する」「相手の気持ちを受け入れる」などの経験の積み重ねが、言葉や表現力を促したと感じた。

⑩豊かな感性と表現

それぞれの活動や遊びでは、振り返りや生活画などの表現活動を積み重ねた。当初は発表することに緊張してしまう子や、思った事を言葉で表現するのが難しい姿も見られたが、次第に具体的な事象や心の動きを伝えられるようになり、それとともに周りの子ども達にも「友だちの発表に共感したり受け入れたりする」姿が見られるようになっていった。生活画においては、頭足人だった絵に身体が描かれるようになったり、遊びの内容や友達関係において、一人ひとりの思いがあふれる絵になり、遊びの深まりから表現活動にも大きな成長が見られた。

11. おわりに

幼児は身近な環境に興味や関心をもち、自ら関わり遊びはじめ、自分なりに試したり工夫したり、友達と力を合わせたりしながら遊びを創りだしていく。「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」に「幼保連携型こども園における教育及び保育の内容に基づいた計画的な環境を作り出し、幼児期における見方・考え方を十分に生かしながら、その環境に関わって園児が主体性を十分に発揮して展開する生活を通して、望ましい方向に向かって園児の発達を促すようにすること、すなわち環境を通して行う教育及び保育が基本となるのである」（総則第1章）とある。環境に触れ対話する中で生まれてくる興味・関心を出発点として遊びが始まり、その遊びに夢中になっていく中で、子ども達は豊かな経験を積み重ねていく。本稿の実践報告における興味・関心の出発点は、今年度完成した自然豊かな第4園庭を中心とした「色水遊び」であった。当初、保育者はコロナ禍における活動の制限や保育時間の差を考慮して、子ども達にとって現実的にどのような遊びが必要なのか思い悩む時期があった。しかし「色水遊び」は、すべての子ども達にとって遊びたいという動機付けになり、遊びを創りだし、意欲をもって展開させ友達とかかわり、満足感や達成感につながる活動となっていった。遊びの場や使った道具や作ったものにも愛着が生まれ「明日はすりこぎを使ってもっときれいな色を出したい!」「Nちゃんが作った同じ色を作りたい!」「明日も続きがしたい!」など、目当てをもって遊び、草花や水の量によって色水の濃さが違うことも見つけ出し、作っては比べて量を調節しながら自分の思う色水を作ろうと粘り強くかかわったり、色水を作ってはペットボトルに集めて色の変化を楽しんだりする姿が見られた。その後も色の不思議、興味関心が途切れない子ども達は、カラーセロハン遊び・カラーポリ袋遊び・カラフルどんぐり転がしと、あらたな遊びへと展開させ、作品展へと向かう活動の中でより一層主体的に遊びを創り出していった。これらの遊びは、色水遊びで繰り広げられた遊びの中での育ちが基盤となっていることに保育者が気づき、色彩に興味を持った子どもたちのためにどのような活動が適切かを探り、子ども達の主体的な活動が生まれやすいように保育者が意図・願いをもって環境を構成していった姿勢から生み出され、その中で友達とのかかわりにも深まりが見られるようになっていった

ことが実践報告を通して見えてくる。

保育者が、こうした子ども達の経験の保障ができていないかを敏感に感じ取る感性をもち、遊びの活動とその環境構成のための教材や素材・道具や場に対する専門的知識を身に付け、子ども一人ひとりの思いや子ども達が共有する遊びのイメージを感知し、見通しを持って判断して環境を再構成していく力を持ち合わせることの重要性が、本実践報告を通して見えてきた。

どのような経験が子どもの創造性を伸ばすのか、好奇心や探求心を揺さぶる環境構成とはどのようなものであるか、そのために保育者はどのような願い・意図をもち、保育を展開していくことが必要であるかをこれからも追求していきたい。

注

- 1) 1号児：満3歳以上の小学校就学前子ども
- 2) 2号児：満3歳以上の小学校就学前子どもであって保育認定を受けた子ども

謝辞

今回の活動にご助言・ご指導いただきました岡佐智子園長先生、清水晶子主幹保育教諭に厚く御礼申し上げます。

参考・引用文献

- 1) 大阪府環境農林水産部みどり推進室みどり企画課：『大阪府みどりの基金事業報告書』2020
- 2) 内閣府、文部科学省、厚生労働省：『幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説』フレーベル館 2018
- 3) 井上美智子、無藤隆、神田浩行：『むすんでみよう子どもと自然』北大路書房 2010
- 4) 長瀬美子、小谷卓也、田中伸：『幼児教育実践ハンドブック』風間書房 2013
- 5) 秋田喜代美：『幼児教育じほう』全国国公立幼稚園・こども園長会事務局 2016
- 6) 井上美智子・登美丘西こども園：『持続可能な社会をめざす0歳からの保育』北大路書房 2020